

「主体的に学ぶ力」の育成に向けた 生徒の主体的・対話的で深い学びの充実

指導主事 大里 卓

研究協力員 熊本県立第二高等学校 教諭 今村 清寿

1 研究主題について

第二高校は、生徒綱領「自主積極・廉恥自尊・礼節協調」の具現化に努め、知・徳・体の調和のとれた全人教育を推進することを学校教育目標の一つにしている。学年に普通科8学級、理数科1学級、美術科1学級の3学科10学級を有し、4年制大学への進学者が大半を占める。平成15年度から平成27年度までの13年間にわたり、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業に取り組み、科学的な創造力・独創力・探究心の育成を目指した。今年度は、総合的な学習の時間で示されている探究的な学習活動と、これまでのSSH事業において理数科で確立した探究活動を連携させながら、普通科および美術科においても探究的な学習を通して、科学的な創造力・独創力・探究心の育成を目指している。

第二高校における、これまでの調査結果から、多くの生徒は学習に対して意欲的に取り組んでいるが、平成23年度と平成28年度を比較すると、自宅学習時間が週あたり約3時間減少し、授業中の学習態度にも受け身の姿勢が目立つなど、主体的に学ぶ姿勢に課題が見受けられることが明らかとなっている。

また、平成28年8月に中央教育審議会から出された「審議のまとめ」では、自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度、社会参画の意識等が国際的に見て相対的に低いことなど、主体的に学びに向かい、学習したことを活用して、自らの人生や社会づくりにおける様々な課題の解決に生かしていくことには課題があると指摘されている。総合的な学習の時間において、探究的な学習のプロセスの中で主体的に学んでいく上で、課題設定と振り返りが重要であること、課題の設定に当たって、自分事として課題を設定し主体的な学びを進めていくようにするため、実社会や実生活の問題を取り上げること、学習活動の見通しを明らかにし、ゴールとそこに至るまでの道筋を描きやすくなるような学習活動の設定を行う

ことが必要とされている。特に、振り返りについては、自らの学びを意味づけたり価値づけたりして自己変容を自覚し、次の学びへと向かう「学びに向かう力」を培うために、言語によりまとめたり表現したりする学習活動を意識することが必要であるとされている。

これらのことから、本單元では、主体的に学ぶ力の育成を目指すこととした。

2 研究の視点

(1) 視点1について

視点1の「学びを引き出す」ためには、生徒たちが主体的に課題を発見し、解決していく学習の場の設定が必要である。そのため、生徒にとって日常生活との関連性が大きく、身近に感じることができ、かつ切実感のある課題に出会う環境を準備した。また、グループワーク中心の活動の中で、結論を先に設定し、結論を論理的に説明するために必要な情報について考察する機会を作ることで、論理性を学ぶことができるようにした。

(2) 視点2について

視点2の「学びを振り返る」については、生徒自身が学習過程において何を求められているかを明確に把握し、見通しを持って学習に取り組めるように、ルーブリック評価表を用いた。また、この評価表を用いて生徒が相互評価を同じ指標を用いて行えるようにした。このことにより、生徒どうしの対話や自分自身の中で、これまでの活動を振り返る機会を作った。

また、ワールドカフェ方式の活動を設定し、他者の役割を経験することで、相手の立場に立って自分自身を客観的に見直すことを促し、これまでの学習活動を振り返ることができるようにした。主体的な学びを実現するためには、客観的評価をもとに自己理解を深める場面が設定され、自分では気づかなか

った課題に新たに気づくことが重要である。

(3) 視点3について

視点3の「学びを支える」については、様々な個性を持つ生徒全員が学習課題に取り組めるように、グループ活動を中心に学習を行った。生徒全員が何らかの役割を持ち、見通しを持って学習に取り組めるように工夫したワークシートを準備し、役割分担をしながら課題解決に向けた取組ができるように配慮した。また、発言することが苦手な生徒であっても、グループ内で意見を出しやすくするために、付箋紙に意見を書いて出し合うようにした。生徒一人一人の意見が同質に扱われることで、一人一人の意見が尊重され、多様な考えを受容しやすい学習の場となるようにした。

3 研究の実際

検証 県立第二高等学校第1学年
単元名 「未来新聞」

(1) 本単元の授業設計

① 単元設定と教科のつながり

今年度は、熊本地震により生徒たちの学習環境は大きく変化した。自宅に戻ることができずに避難所から通学する生徒、学校までの通学に公共交通機関を利用することができなくなった生徒など、生活環境の変化とともに、学校自体が被災し、仮設校舎での学習や校舎内の立入制限など、安心安全な場であるはずの学校において、不安とともに学習せざるを得ない状況となった。その中で、生徒たちが当事者意識を持ちながら地域の課題を発見し、その課題が解決された未来を描く活動を通して、地域や自分自身の将来や現在を見つめ、主体的に社会に進んで参画する意識を高めていけるように「未来新聞」という単元設定を行った。

さらに、各教科との連携を図りながら、総合的な学習の時間における生徒の学びが探究的な活動として発展的に繰り返され、生徒が各教科とのつながりを意識できるようにしたいと考えた。「現代社会」の授業では、夏休みの課題の一つとして、生徒が政党の構成員となり、熊本をよくするための政策を提言するというレポート課題を設定した。本単元では、「現代社会」のレポートで設定したテーマをもとに、

よりよい熊本が実現した未来が記事となった新聞を制作し、発表するという設計にした。本単元において、「現代社会」の課題レポートを通して発見した現在の熊本の課題に、さらに深く向き合いながら考えることで、主体的な学びの場となるようにした。未来の出来事を考えるため、その未来が実現したことを示す根拠は存在しない。そのため、現在の世の中の状況を踏まえて、未来が実現するためには何が必要かを独創的に考えることができ、生徒の自由な発想や考えのもと、論理性を学ぶ機会になる。本単元の後には、「テーマ研究」を行い、未来新聞によって描かれた未来が実現可能かどうかを、根拠となる情報を収集・整理して検証し、まとめる学習を行うことになっている。本単元は、次単元の課題設定を生徒が主体的に行う手立てとなる。

② ルーブリック評価表と授業の振り返り

新聞のテーマから製作過程、内容、発表に関して、生徒自身が何を求められているのかを明確に知ることができるようにルーブリック評価表を用いた。このルーブリック評価表は、本単元の最初に、生徒に配布している。新聞の発表会においては、このルーブリック評価表を用いて自己評価を行い、同時に他者評価と比較することで、自己評価と他者評価のズレから自己を振り返り、新たな気づきを得ることができるようにした。ルーブリック評価表の活用については、夏休みの家庭科の課題にも用いるなど、学校全体として取り組んでいる。

グループで作成した未来新聞ですが、自分自身の取組について評価してください。

○下記項目毎に、自身の取組を評価し、適する文章をマーカーで印をつけてください。

評価項目	評価の基準			
	期待している(2点)	一部改善を要する(1点)	改善を要する	
テーマ	具体的にワクワクする記事になった	実現可能な記事を提案できた	テーマを絞り切れなかった	
完成へ向けた連携	お互いに十分連携がとれ、完成できた(下書きまでOK)	わずかに完成していない部分がある	完成していない	
ポスターの評価	内容の記述	充実した内容を記述している	内容を整理して記述している	記述が不十分である
	内容の連携	お互いに十分連携がとれている	役割分担に工夫が必要	連携が取れていない
	視覚的手法	視覚に配慮した手法が複数用いられている(色の工夫やグラフなど)	視覚的手法が1つはある	視覚的配慮がない
	文字の大きさ	適切な大きさである	少し小さい/うすい	小さすぎる/大きすぎる
	表記	漢字等が正確である 記述がとても丁寧である	おおむね正確である おおむね丁寧である	漢字等に複数間違いがある 読みにくい/雑である
口頭発表	声	十分に聞こえた	一部聞き取りにくかった	聞き取りにくかった
	スピード	はっきりと聞き取れる速さ	少し早かった	早すぎて聞き取れない
	時間	3分間有効に使用した	2分程度だった	1分以下だった
	手振り	指し示したりするなどわかりやすかった	一回指さして説明した	何も手振りがなかった
	目線	目線を配りながら説明できた	時々目線を聞く人へ向けた	新聞のみに目線があった
	質問への解答	準備が十分で適切に答えられた	準備が不十分で答えられない部分があった	答えられなかった

図1 未来新聞ルーブリック評価表(自己評価)

(2) 指導の実際

① 本単元について

時間	学習活動 【探究的な学習の過程】	指導上の留意点
1	くまもと未来新聞①：現代社会の夏休みレポートをベースに、熊本の課題や身近な課題をテーマにした未来の新聞記事の見出しを考える。 【課題の設定】	見通しを持って新聞作成に取り組むことができるように、ワークシートを配布する。 付箋紙を活用して、班員全員が意見を出すことができるように配慮する。
2	くまもと未来新聞②：未来の新聞記事の内容を話し合い、概要、経緯、今後の展開、用語説明、図の構成を考える。 【情報の収集】	未来から現在へ向かって考えることで、結論から先に考える思考法を学べるようにする。
3	くまもと未来新聞③：新聞の作成（A3用紙）。各自が作成してきた記事を新聞として構成する。【整理・分析】	班員全員が分担して記事を書くように促す。
4	くまもと未来新聞④：ワールドカフェ方式で発表。【まとめ・表現】	自分たちの考えを他者に分かりやすく伝えることを意識させ、振り返りによる気づきを促す。

② 本時について

過程	学習活動	教師の指導と評価等
導入	1 諸注意の確認 (1)グループに分かれて座り、ワールドカフェの方法を理解する。 (2)作成した未来新聞の確認と発表の打ち合わせを行う。	・必ず全員が発表をすることを確認する。
学習課題（めあて） 未来新聞の記事を他者に分かりやすく伝える		

展開	<p>2 ワールドカフェ方式で発表会を行う。</p> <p>(1)班内の半分の生徒は発表者となる。残りの半分の生徒は、隣の班の発表を聞く。（1回の発表につき、3分説明、1分質疑、評価シート記入1分、移動1分）発表者は2回目の発表をする。このとき、発表を聞く人はさらに隣の班へ移動する。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・ループリック評価表を用いて、発表を聞く人は他者評価を行う。 <p>(2)自班に戻り、班内で発表の仕方や発表内容について意見交換をする。</p> <p>(3)(1)と同じ要領で、班内で発表者と発表を聞く人を入れ替え、2回発表を行う（時間同じ）。</p> <p>(4)自班に戻り、班内で発表の仕方や発表内容について意見交換を行い、学びを共有する。</p>	<p>【視点2】 ワールドカフェ方式の発表会で全員が発表を行い、他者と学んだことを共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者がタイムキーパーをする。 ・積極的に質問をするように声かけをする。 ・他者の発表を評価しながら聞くことで、自らの発表態度へ反映させるように促す。 ・学んだ内容を出し合うことで学びが深まるように促す。
まとめ	<p>3 振り返り</p> <p>(1)ループリック評価表を用い、自己評価を行う。グループ内で、自己評価と他者評価を参考にし、制作した新聞や発表の改善点などについて話し合い、単元を通しての成果と課題に整理する。</p> 	<p>【視点2】 ループリック評価表を用いて、自己評価と他者評価で自らの学びを振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価表を見比べることで、自らの成長を実感できるように配慮する。

<p>4 次回予告 今回は同じ内容をテーマ研究にすることを説明する。</p>	<p>・発展的な内容や、別の視点から捉えなおした内容でもよいことを伝える。</p>
---	---

(3) 検証結果と考察

① 自己と社会の関わりを意識できた「未来新聞」

各班が設定した新聞のタイトルは次の通りである。

- 「高校生によるアートイベント開かれる」
- 「行定勲氏、映画発表再び」
- 「熊本の星の活躍続く」
- 「熊本城一夜で修復，謎の神風」
- 「くまモンの投票用紙，投票率向上ねらう」
- 「地震から5年，耐震見直しへ」
- 「SNS で話題沸騰！熊本城崩壊から復活までの奇跡のストーリー」
- 「地震から20年，熊本の観光収入日本一」

制作した新聞のタイトルを見ると、すべてのグループが4月に起きた熊本地震が関連したテーマを設定しており、熊本地震が生徒たちに与えた影響の大きさを感ずることができる。しかし、すべてのテーマは熊本地震からの復興が現在よりも進行し、明るい未来を描いたものとなった。また、第二高校の生徒や卒業生が主人公となっている新聞が多く、生徒たちが社会とのつながりを意識し、自らの社会参画によって、よりよい未来をつくりたいと感じていることがうかがえる。また、グラフなどを用いて、未来の姿を成立させるデータを作って掲載している新聞もあり、現実味を持たせようと工夫した班も見られた。単元終了後の自由記述において、生徒たちは次のような感想を書いている。

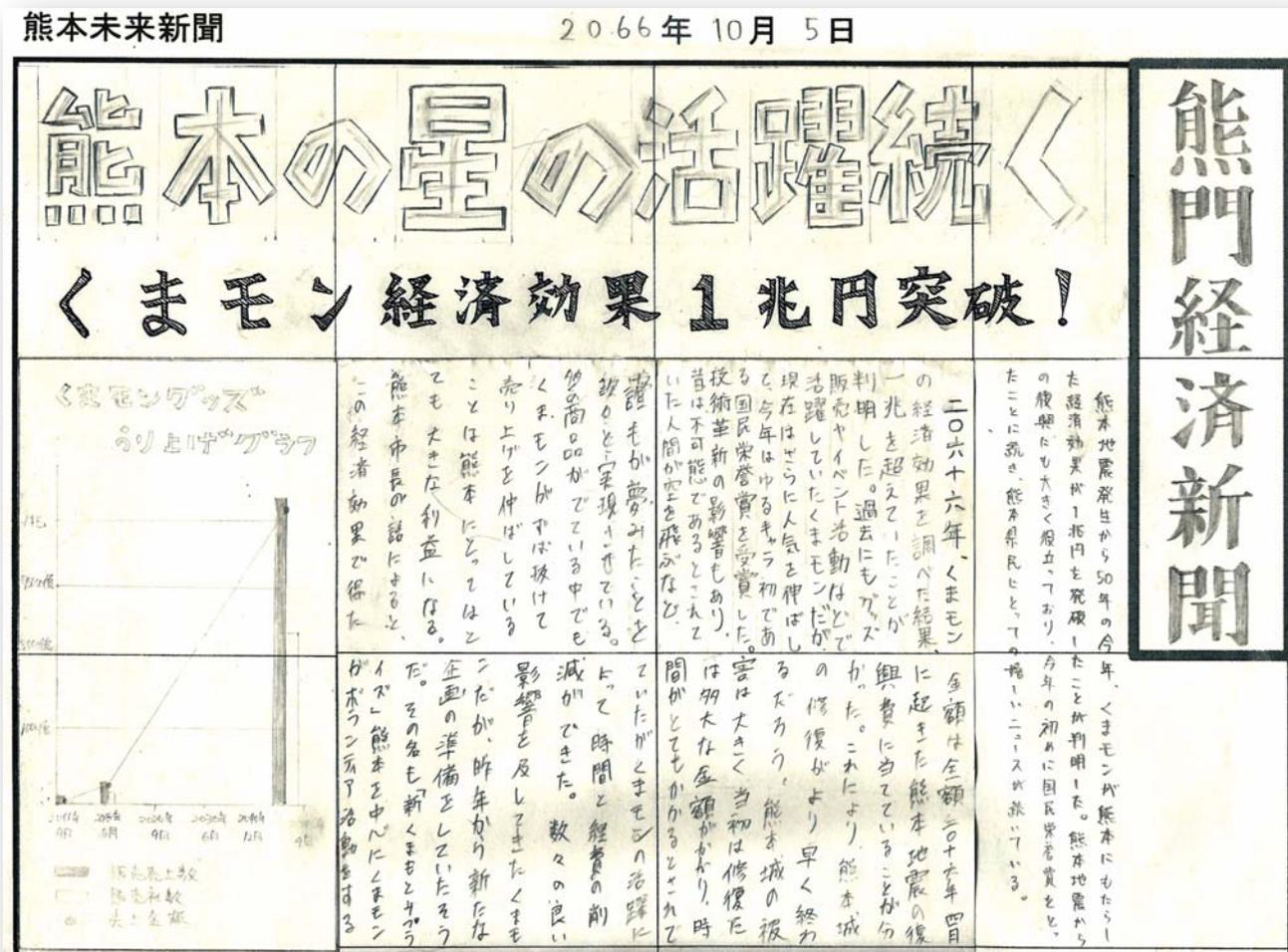


図2 制作した未来新聞の一部 (3班)

「未来から過去（現在）のことを書くようにすることが難しかった。未来のことを考えることで、本当に起こりそうだと思うこともあった。」

「自分達が考えた内容を、さも現実で起こるかのようリアルな目線から新聞を作ることができた。」

「未来を作るというのは、非常に現実味をかねた将来について考えるという感覚に似ていてとてもおもしろかった。」

「ただ、未来を想像して書くだけではなく、現在とのつながりを考えることで、実際、現実にも目を向ける良い機会となった。」

② 「現代社会」のレポートと「未来新聞」の制作
クラスには7つの班が構成された。ここでは、1班がどのような過程を経てテーマ設定に至ったのかを整理する。1班は、夏休みの「現代社会」のレポ

ートのタイトルを次のように作った。

「震災復興について（復興に向けて高校生ができること）」

熊本地震から4ヶ月経過し、熊本の復興に必要なものは何かを聞き取り調査等をもとにまとめている。生徒たちは、ライフラインや公共交通機関の復旧を望む声が多いのではないかと考えていたが、近くの健軍商店街では、それらの声はなく、商業施設の再開が望まれていることを知った。第二高校の生徒への聞き取り調査では、商業施設の再開に加えて、ライフラインや公共交通機関の復旧の声があった。調査をした生徒たちは、居住地域が異なれば復旧に必要なものが違うことを実感した。さらに、健軍商店街で聞き取り調査を実施したときに、調査に参加してもらえなかった人からも「ごめんね」などと笑顔で優しい対応をしてもらっている。現代社会のレポートである政策の提案について、生徒たちは、自分

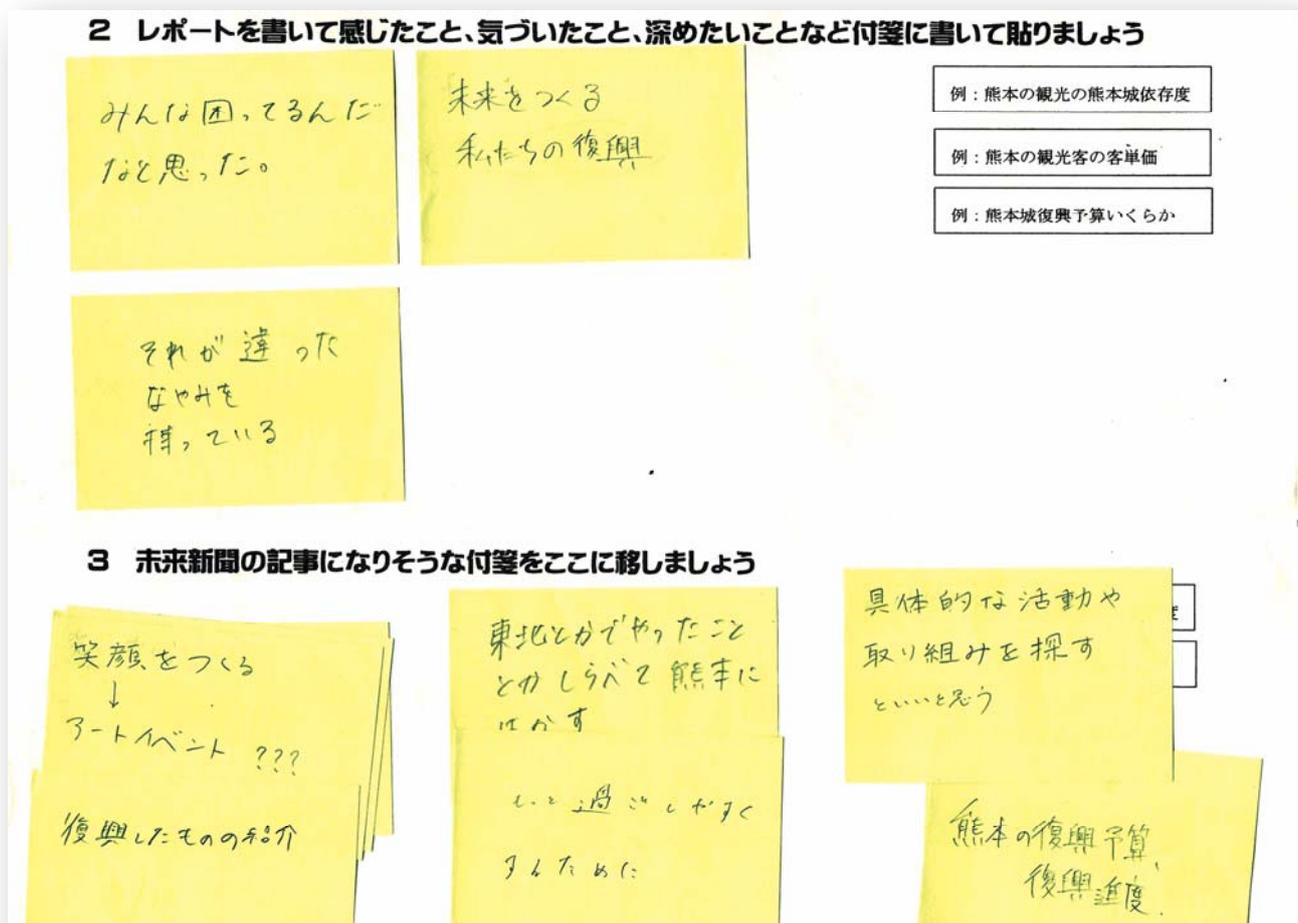


図3 ワークシートの一部（1班）

たちにできることは何かを生徒目線で考え、地域の人たちの笑顔を作っていく活動をしたという強い気持ちを持つようになった。

1班では、このレポートをもとに「笑顔」というキーワードを設定して、絵を描くという生徒たちの得意な活動によって地域の人たちが笑顔になるという未来を描き、記事を作ることにした。

記事の内容は、ワークシート（図2）を活用しながら、グループで話し合い、分担して記事を書くこととなった。ワークシートから、付箋紙を活用しながら班員が意見を出し合っていたことが分かる。

③ 学びの振り返りと主体的な学び

ア 新聞完成までのグループ内の連携について

単元終了後において、生徒たちの自己評価の中で、最も低い評価となったのは、完成へ向けた準備という項目であった。（図3）

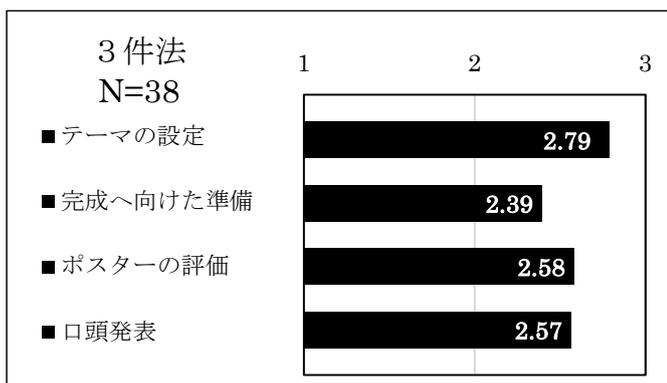


図4 学習に関する自己評価①

このアンケート結果にあるように、生徒たちはグループ内の連携が足りず、十分な準備ができなかったと感じている。自由記述の感想文からも、次のようなグループ内の連携に関する記述が非常に多く見られた。

「なかなか一つになれないときもあったが、最終的にはよい新聞が作れたと思う。もう少し、仕事の割り振りを考えるべきだった。」

「準備がギリギリになってしまったのは次回から反省し、改善すべき点だと思った。」

「改善すべき点は、下書き完成までの班の連携がうまくいっておらず、記述が少なくなってしまうなど、未完のままだったということ。」

次単元の「テーマ研究」においては、自分の強みを生かした役割分担を促していく場面の設定や、結論を裏付ける根拠を意識して考える場面の設定が本単元よりも丁寧に準備されている。本単元の振り返りの中で、生徒たちが必要と感じた「グループ内の連携の必要性」をより自分事として意識し、生徒どうしが主体的に連携して取り組むための意識作りはできたと思われる。

イ 他者に分かりやすく伝えることについて

発表会において、それぞれの発表後に質問を受ける時間を設けたことによって、伝えたかったことと伝わっていなかったことに関して発表者自身が振り返るきっかけを作ることができた。これにより、新聞の制作過程において感じていた疑問点などを表出させ、有意義な振り返りの時間を作ることができたと考えられる。発表会の中間での話し合いでは、教員が話し合う視点を明確に示したことで、班ごとに、後半の発表者に発表のコツなどを伝えたり、他の班の発表内容を伝えたりする様子が見られた。また、発表会の最後の話し合いでは、グループ内の生徒全員が発表者の立場を経験しており、クラス全員が経験をもとに発表について話し合うことができた。生徒たちは、新聞の作り方や発表の仕方について振り返り、分かりやすく伝えることに関して多くの気づきを得ることができたと思われる。次に、話し合いの中で出た発表に関する意見を示す。

○アートイベントが行われた場所について、発表の途中でやっと理解できたことを、発表後の質問によって気づき、振り返りの中で、聞き手に対して場所の情報を始めに伝えておかなければならないと思った。

○記事を書くときに、アートイベントで描いた絵について明確に設定しておらず、グループ内で情報共有ができていなかったことを自覚した。また、記事を作成した際に、描いた絵が何なのかということが気になっていたが、話し合いをしていなかったことを思い出した。

○発表者の立場と聞き手の立場を経験して、新聞の内容の順序を入れ替えて構成を修正した方が伝わりやすいと思った。

○他の班の発表を聞いて、グラフや図などの視覚的な表現方法があると、新聞記事の内容の説得力が高くなると思った。
 ○3分間の発表を経験して、発表時間が余ってしまい、記事の内容に物足りなさを感じた。内容をもっと充実させる必要があると思った。

アンケート結果から分かるように、生徒たちは自分たちの活動や思考の振り返りができたと感じていることが分かる。(図4)

ウ ルーブリック評価表と自己評価について

単元終了後のアンケートの自由記述の中に、次のような発表会に関する感想があった。

「発表する側も聞く側も楽しく活動できた一方で、手振りや目線など、不十分な点が自分にあった。」
 「聞き手の目を見て説明していなかったので、しっかり見てできるようになりたい。」
 「グラフなど、もっと現実味が増すものを加えたら良かった。」
 「声の大きさもちょうどよく話せていましたが、指し示したり手振りが少なかったと思いました。」

ルーブリック評価表に出てくる評価ポイントが感想の随所に書かれており、生徒たちが、ルーブリック評価表の項目を意識して振り返りを行うことができたと考えられる。(図5)

エ 自己評価と他者評価の関係性について

自己評価と他者評価を比較すると、いずれも他者評価の方が良い結果となり、自己評価と他者評価の間に整合性は見られず、自己の課題発見の材料とはならなかった。評価を受ける発表者の目の前で、評価者が評価表に記入したことで、生徒たちが、低評価をつけることを避けたようであった。このことから、自己評価と他者評価による自己の課題発見を実現させるためには、どのような状況で評価させることが望ましいか考えていく必要がある。どのように自己評価と他者評価を連携させていくかは、今後検討が必要である。

オ 主体的な学びについて

本単元前後のアンケートの結果から、本単元を通じて、主体的に学ぶ力が高まったと生徒たちは考えていることがうかがえる。(図6) 特に、主体的な学びがあまりできていないと感じていた生徒たちの意

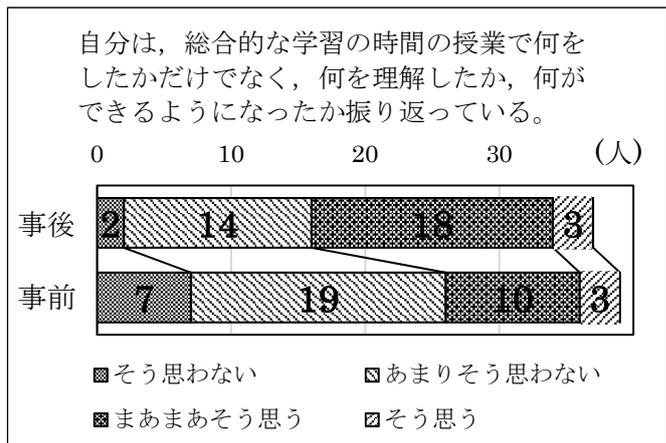


図5 意識調査①

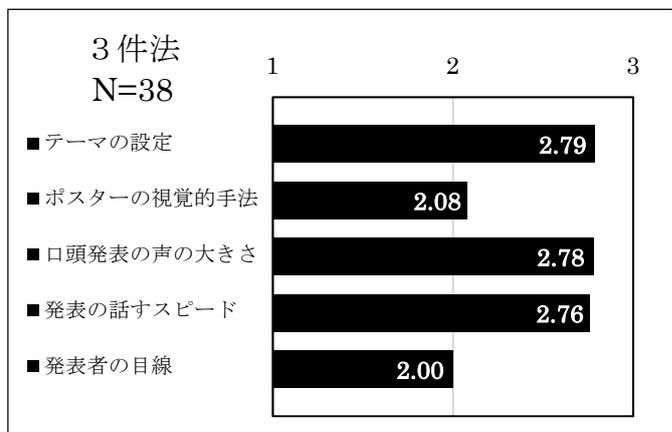


図6 学習に関する自己評価②

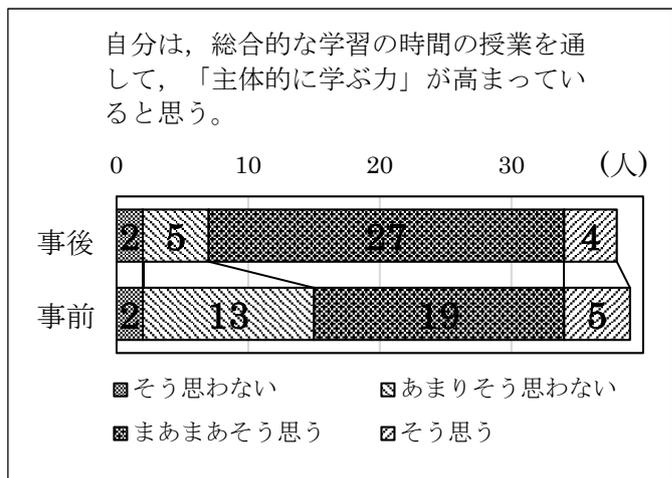


図7 意識調査②

識が向上したことが分かる。

また、総合的な学習の時間に対して、面白さを感じ、なりたいたい自分の未来の姿に近づくために役立ったと考える生徒も多くなった。社会に積極的に関わりながらよりよい未来を作り出していくという社会参画への意識も高まったと考えられる。(図7)

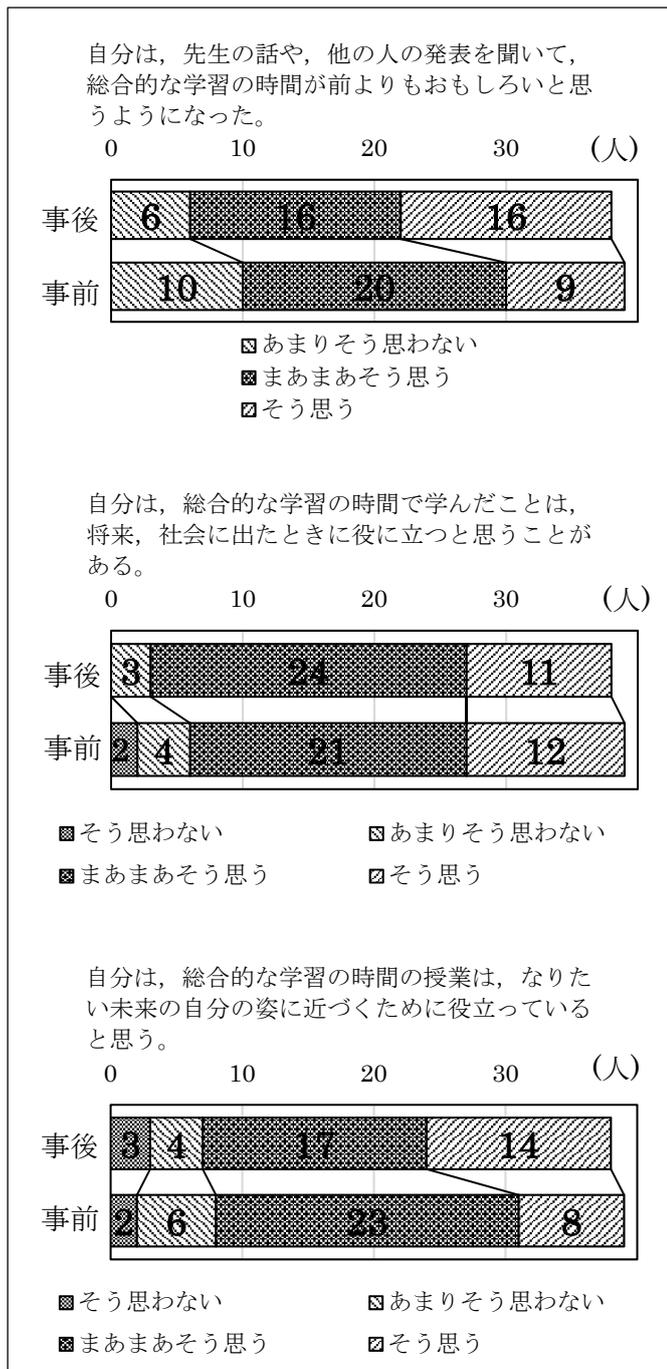


図8 意識調査③

3 研究のまとめ

(1) 本研究の成果

① 昨年度までの成果

昨年度までは、次のような成果が見られた。

○視点1「学びを引き出す」、視点2「学びを振り返る」、視点3「学びを支える」の3つの視点を生かすことの有効性を見出した。

○3つの視点を生かしながら、地域から見出される様々な問題に児童生徒が対峙することで、郷

土の将来への思いや責任について、当事者意識を持って取り組む学習へと発展できた。さらに、探究活動を発展させていくことができ、総合的な学習の時間を活性化することができた。

② 本年度の成果

本研究では、「現代社会」のレポートをもとに未来を考え、新聞を制作するという単元設定とした。このことにより、「現代社会」のレポートを深化させて考えることができた。「現代社会」と「総合的な学習の時間」をつなぐことで教科横断的な学習となり、生徒がよりよい未来へ向けて、どのように社会と関わることができるかを、より一層自分事として捉え、学習に取り組むことができた。また、ルーブリック評価表の活用やワールドカフェ方式の発表会を行うことで、自己評価と他者評価を同じ指標を用いて行い、自己の振り返りによる自己変容の自覚と次の学びへの意識付けを行うことができた。ルーブリック評価表は、学習の見通しや振り返りを有効に行う手段として、「家庭基礎」の夏休みの課題でも活用されており、教科の枠を超えた取組となった。各教科等と連携しながら、自分事として捉えることができる課題を設定し、他者との関わりを生かして、学びの振り返りの充実をはかることで、生徒の主体的な学びを引き出すことができたと考える。

(2) 今後の課題

本研究では、学習の振り返りの充実を目指してルーブリック評価表を活用したが、自己評価と他者評価のズレを評価項目ごとに客観的に把握するのは難しかった。今後、他者評価の在り方を検討する必要があると考える。また、他の教科とも連携を深めることで、「主体的に学ぶ力」がどのように高まるか、「主体的に学ぶ力」がどのような場面で活用されるかを研究していく必要がある。

《引用・参考文献》

- ・高等学校学習指導要領（平成21年3月 文部科学省）
- ・高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（平成21年12月 文部科学省）
- ・今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）（平成25年7月 文部科学省）
- ・中央教育審議会教育課程企画特別部会「審議のまとめ」（平成28年8月1日 文部科学省）